
彼方に降る雨

ムクイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼方に降る雨

【Nコード】

N1580L

【作者名】

ムクイ

【あらすじ】

銀魂映画公開記念。

高杉を中心としたシリアルな話です。

時系列的には紅桜の後、桂さんの髪の毛が再び伸びてきた頃をイメージしています。

？

彼^かの人に見た面影は

いま亡きあなたの思い出か　はたまたうつろつ残像か

雨の匂いに目を閉じる

想い馳せるは阿鼻叫喚

キセルの煙を吸い込めば　遠い記憶が

胸を、突く

< 彼方に降る雨 >

？

「アタシ、思っんすけど」

窓辺に肘を付きつつ、退屈しきった表情の女は背後の影に声をかけ

た。

少しのあいだ待ってみるも返事は無い。

大して興味も抱かず振り返ると、会話を試みた相手はなにやら一心不乱に本のページを捲っていた。

パラパラと乾いた音が二人を隔てるように響き渡る。

女は隠すこともなく舌打ちを洩らすと、窓の外に続く広大な宇宙の暗闇へと目をやった。

彼女の名は来島また子。

金髪の太いツインテールと奇抜な服装が印象的だった。

男ですら怯む猪突猛進な大胆さと戦闘に関する天賦の才。

銃器の扱いに長けた彼女は、“紅い弾丸”という通り名で知られる二丁拳銃の使い手でもあった。

それゆえにある人物に目を掛けられ、現在のまた子はその人物が統括する<鬼兵隊>という武装組織に主力戦闘員として所属してる。

「…… やっぱリム力つくっス」

しばらく拷問のような無音に耐えていたまた子であったが、とうとう我慢の限界に達し、手元にあった缶ジュースを引つつかむと後ろの男に向かって投げつけた。

まだ半分以上の残っていたそれは見事に男の顔面へと命中し、中身が盛大にぶちまけられる。

「なあにするんですか、また子さん」

男は自分を拭うよりも先に読んでいた書物を救うことに専念している。

あまつさえ自分の着物の裾を雑巾がわりに扱いながら、開いたままの妖しい瞳孔でやっとまた子を視界に入れた。

「あなたこれ、レアものなんですよ？徹夜で並んで手に入れた代物なのに、オレンジ臭くなったらこれ、どうするんですかぁ？」

「…… この真性のロリコンが」
ふやけた表紙で微笑む水着姿の少女は、どう見ても成人には達していないかった。
それどころか見方によっては半ば犯罪めいた匂いのする年頃だ。
しかし男は、
「ロリコンではありません。ただのフェミニストです、子供好きの」
いつもの決め台詞で事態の修復を図っていた。

男の名は武市変平太。

意表をついた鋭く緻密な戦略の立て方から、彼もまた策略家として鬼兵隊に招かれある男の傘下に属している。

鬼兵隊の中でも随一の頭脳ゆえに参謀的ポジションにあるのだが、傍から見ればただの変人である。

実戦向きではないにも関わらず、根からの武道派であるまた子と組まされているのは、いざというとき彼女のブレーキとして機能させるための策でもあるのだろう。

そのときが永遠に来なければいいのにと、武市は秘かに心の中で願っていた。

「あーあ！何でアタシが武市変態と一緒にこんなところで待機してなきゃいけないスカ！」

「…… “変態”じゃなくて“先輩”でしょうに。それにそれはこっちの台詞です」

少し前に地球は江戸で一暴れしたばかりの彼らは、主に幕府の追手から逃れるため、宇宙に駐屯することを余儀なくされていた。

彼らの上司が宇宙海賊・<春雨>と手を組んでいたことが不幸中の幸いといえるだろう。

「いいじゃないですか。たまにはのんびり宇宙で過ごすのも」

傍らに詰まれたグラフィア雑誌を整えつつ、武市はまた子に言った。そんな武市を、また子は汚いティッシュでも見るように横目で見ている。

「だからって何もこんな天人がギッシリ乗った船に同乗しなくても、

」

「春雨と同盟を結んだ以上、誰かが彼らと同行しなくてはいけないんですよ。我慢してください」

「だったらそれは武市せんば、変態が一人ですればいいっす。アタシはあの方の元と一緒に地球に残ればよかったんすよ。大体、何で晋助様だけ」

「また子さあん」

徐々に熱くなってきたまた子の口上が遮られる。

「これはその晋助様からの指令ですよ。“時が来るまで宇宙で大人しくしている”、と」

「……う、」

「もしも貴女が彼の役に立ちたいと思うんでしたら、私はここに居ることをお勧めしますよ」

「……むー」

元来から口喧嘩を得意としないまた子は、完膚なきまでに言い包められ、呻る事しかできなかった。

そして最終的に諦める事を選択し、再び宇宙の真空に投げやりな視線を落とした。

その男の名は 高杉晋助。

彼こそがまた子と武市の共通の上司であり、鬼兵隊を率いている男である。

かつての攘夷戦争で天人を相手に立ち回り、多くの同胞が死した後

も精力的に攘夷活動を続けていた。

攘夷浪士の中でも最も危険と幕府や一般人から恐れられてはいたが、志を同じくする者たちにとって彼は迷い込んだ闇の中で揺れ動く篝火のような存在だった。

それは破滅を招く荒み歪んだ炎。

しかし一度目にした者の魂をも驚掴み、瞬時に掌握してしまう力強さを持った灯りだった。

彼の為になら命を投げ打つことさえ厭わない者は鬼兵隊の中に大勢存在している。

また子や武市もまた、彼の抗いがたい魅力に籠絡されているのである。

またもしばらく沈黙が続いた。

宇宙船の微かな振動がシートの背を介してまた子に伝わってくる。

「ねえ、武市せんぱい」

「何ですかあ？」

今度はちゃんと返ってきた。

また何かを投げられたら堪らないと思ったのだろう。

形ばかりの応対に多少むっとしつつも、また子は先刻から胸に燦っている疑問を吐き出してみる。

「どうして、晋助様は单身地球に残ったんスかね？」

「一人ではないでしょう？万斎殿が合流していますからねえ」

「それなんスよ！」

武市の言葉にまた子は伏せていた体をがばつと勢いよく起こして、

吠え立てる。

「よりによってなんでアイツが、別にアタシじゃなくてもいいっすけど、でも、でもでも何でアイツなんスか！」

「……それは、まあ晋助様なりの考えがあるから、でしょう」
武市は珍しくはつきりとしらない口調で言葉を濁した。

大抵の人物や事柄に対して正確な分析ができた武市も、高杉に関しては色々と分らないことが多かった。

たとえば彼が江戸を破壊したいと思う根底的な理由についてもそのひとつだ。

その動機が過去に起きた何らかの出来事に由来することまでは把握していたが、それ以上の理由までは教えられることはなかったし、知りたいとも思わなかった。

高杉が他者との間に引いた境界線は楔の如く強固なもので、そこから先に進むことは困難極まりない。

踏み入ることが憚られる。

奈落の底を覗き込むようで、武市は恐ろしいとすら思っていた。

「晋助様の周りを詮索するのは得策とはいえませんか？」

そんな境界線を土足で踏み越えていきそうなまた子に、武市はやりわりと警告を発する。

「貴女が本当に晋助様を信頼しているのなら、彼のやりたいようにさせてあげなさい」

「別に詮索してるわけじゃないっす。ただ……」

「“ただ”？」

「……」

何度か言葉を紡ぐとまた子は口を開いては、なにも言い出せないまま再び閉じてしまった。

相当言いにくいことなのだろう。

（何なんでしょうかねえ……）

武市は山積みになった雑誌の一番上から新しいグラビアを抜き取ると、無言のままそれに目を通すことにした。

いたずらに有り余っている時間がだけが過ぎていく。

「ねえ、武市せんぱい」

「何ですかあ？」

「晋助様は、男色家なんスかね」

「……………」

今度は武市が言葉を飲む番だった。

絶句している彼の顔を見ないよう、反対側に顔を背けつつもまた子は問い続ける。

「ねえどうなんスかね？」

「……………」

「地球に残ったのだって、またあの桂と会ってるからじゃないんスか」

「…………… 知ってたんですか」

高杉は時々誰にも声を掛けずにふらりと出かけては、何も無かったように戻ってきていることが度々あった。

そんなときは決まって 桂小太郎 に会っているのだということを、武市を含め勘の鋭いものたちは知っていながらも黙認していた。ただその中にまた子の存在も含まれていたとは、あまりに想定外のことだった。

高杉と桂は幼少期を同じ寺子屋で過ごし、同じ師を持つかつての同志だった間柄だ。

攘夷戦争を共に戦い、今では同じ攘夷浪士でも過激派と穏健派という違う道を歩む関係にある。

志を違えた二人がいかなる理由で密会を繰り返していたかを問いたずほど、武市は野暮ではない。

願わくばまた子も同じであると祈るしかなかった。

当のまた子本人は武市の沈黙を肯定だと決めつけ、深い溜息を吐き出していた。

「あーあ、やっぱりそうなんスね」

「いや、まだそう断定はできませんよ」

「でも否定もできないっス」

「まあそうなんですけど……」

「じゃあ、もしかすると万斉の野郎ともできてるんじゃない、」

「それはご本人に直接確認してみたらどうですかあ？」

「できるわけがないじゃないっスか！」

また子の絶叫に、それはそうだと武市も納得した。

ふとまた子を見るといつのまにか両手で顔を覆っている。息をしているかを確認することもできなかった。とても静かで、あまりにも密やかな嗚咽。

別に特別なことではない。

高杉に対するまた子の感情は傍から見ても判り易かった。

武市が抱いていた尊敬や憧れの念とは別に、また子は女性としての好意を高杉に持っていたというだけの話だ。それはとても幼稚だが、しかし純粋な想い。

「また子さあん？」

「…… 何スカ」

「泣いてるんですか？」

「…… つ！泣いてるわけじゃないっスカ！」

両目を真っ赤に腫らし、鼻水を垂らしながらまた子は武市に噛み付いた。

やれやれと武市は苦笑する。

「やつぱり泣いてるじゃあないですか」

「つるっさい！武市変態のくせに！ロリコン変態のくせにっ！」

「また子さあん？仮に晋助様が一般的な性愛嗜好の持ち主だったとしても、多分、貴女じゃ脈なしです」

「あーもううるさいうるさいっス！武市馬鹿！」

頭の弱そうな罵倒を並べ立てながら、また子は目元を拭った。

「別にアタシはそういう理由で晋助様に付き従ってるわけじゃないっス！」

「ハイハイ」

「アタシはただ、晋助様にはいつも幸せでいてほしいだけなんスよ」

「…… それはまた、難しそうですねえ」

そう呟きながら、また子の顔を盗み見た。

涙で塗れた頬が光る横顔が、宇宙を透かしたガラス越しにいつになく穏やかに映っている。

「ねえ、武市せんぱい」

「なんですかあ？」

「地球は、晋助様のいる場所は、どんな天気なんでスカね？」

武市は答えを持たなかった。

ただ、

あの男には煙るような雨が似合うだろうと、何となくぼんやりとそう思った。

？

地上では遅めの夕立が降り始めていた。

突発的に襲来した豪雨に、傘を持たない人々が雨宿りを試みている。急ぎの用事を抱えた男が、雑踏の中をわき目も振らず駆け抜けていく。

途中、男の足が水溜りを跳ね上げ、茶色く濁った泥水が通り掛けの女の着物にじんわりと浸みこんだ。

子供たちは濡れるのも構わず、はしゃぐように飛び回っている。怒声は雨音に掻き消され、江戸中を流れる河川の水かさが一気に増していく。

まるですべてを洗い流すような、何もかもを始めからやり直そうとするような雨だった。

そんな世界の営みを、高杉 晋助は古宿の二階から眺めていた。

肌蹴た藤色の着物から日光の恩恵とは程遠い色の素肌が覗いている。腐りかけた窓枠に浅く腰掛け、唇には安物の煙管が軽く銜えられていた。

時折、細く煙を吐き出しては湿った空気を吸い込む以外、男に動きはない。

その右目だけが雨の向こうに映る情景を見つめていた。

ただ呪う様に、見つめ続けていた。

*

？

忙しなく行きかう人の波を、一人の男が泳ぐように宿屋に向かって歩いていった。

その頭上に傘はない。

雨は革のジャケットの隙間を伝って素肌まで達している。

しかし男の表情はサングラス越しにも涼やかで、どこことなく楽しんでいるようにも見えた。

いつもなら耳に当てている大きめのヘッドフォンも、今は首に掛けられたままだった。

男の名は 河上 万斉。

普段は音楽プロデューサー・つんぼ として数々のアーティストに楽曲を提供し生計を立てている。

その実力は江戸随一と名高かったものの、“人斬り万斉”として暗

躍っていた時代からお上に目をつけられていた為、メディアへの露出はほぼ皆無に等しかった。

何れにせよ万斉にとってそれは趣味の一環に過ぎず、実際は鬼兵隊で高杉の剣として暗躍する日々を送っていた。

彼にとつて、攘夷志士の肩書きや幕府転覆という名目などはどうでもよかった。

ただ高杉の手で世界がどう変革されていくのか知りたかった。

そして何より万斉は、高杉という男の“魂の響き”にどうしようもなく魅せられてしまっていたのだ。

宿屋に着くと、万斉は勝手知ったる様子で軋む階段を上がり、角部屋へと歩を進めた。

「晋助、入るでござるよ」

その部屋は湿気た雨の空気と煙草の匂いが合わさって、薄い靄が掛かっているかのようにだった。

「よお。遅かったな」

行灯も焚かず暗がりの中で佇む高杉の姿は幻影のように朧げだった。万斉は背負っていた三味線を脇に置くと、水滴のしたたる前髪をそつと拭った。

「ああ、少し降られてな」

高杉はそんな万斉の様子にくくつと喉の奥で笑うと、立てた膝に煙管を数回打ちつけた。

「だから言っただろうが。傘を持っていけつてな」

確かに万斉は出かける前に高杉にそう諭された。

しかし外はどこまでも突き抜ける見事な秋晴れで、決して汚されることのないような空の色はそんな忠告さえ笑い飛ばすようだった。

目の前の男が獣並みの勘を有している事は嫌というほど知っていたというのに。

「——それで、“お姫様”はお帰りになられたでござるか？」

万斉の含みのある物言いに、高杉はゆるりと頭^{かぶり}を振った。

「いいや。隣で寝てるよ」

唇の隙間から細い紫煙を吐き出しながら、万斉の横に控える襖を顎で示した。

「……寝ている？」

その言葉は、万斉にどす黒い不安を植え付けた。形容しがたい胸騒ぎを抱えたまま、万斉は汚れの染み付いた襖を引き開けた。

向こう側には仄暗い闇が巢食っていた。

しかし徐々に目が暗闇に慣れていくと、その部屋の異様な光景が明らかになった。

破れた障子に捲れあがった畳。

有田焼の一輪挿しは倒れ、活けられていた花はぐちゃぐちゃに踏み潰されている。

壁には鋭い爪で抉られたような痕が幾つも付けられ、まるで何か大きな生き物が暴れたような有様だった。

一瞬言葉を失った万斉は、圧倒的に破壊し尽くされた部屋の真ん中にある“それ”を見て、思わず高杉を振り返らずにはいられなかった。

「晋助……」

桂 小太郎は上半身を晒したまま、乱れた布団の上に投げ捨てられたように突っ伏していた。

その体には真新しく生々しい傷と色鮮やかな痣の華が、伸び始めた黒髪の隙間で咲き乱れている。

牢獄のように薄暗い部屋の中、その表情は窺えない。

脱げかけの着物が辛うじて下半身を隠しているのが幸いだっただ。その下に見えるであろう惨状は想像するに難くない。

それは一人の人間に対する完全なる蹂躪だった。

暫くの硬直を経て、万斉は酷く重たい両足でその寝所に踏み入ると、黴臭い押入れから薄手の掛け布団を取り出し、痛々しい体に掛けてやった。

桂に反応はなかったものの、口元に手を当ててみると、そこに微かな空気の揺れを感じ取れた。

「気は、済んだでござるか」

死んだように眠る桂を背後に襖を閉めると、万斉は厳しい視線を浴びせかける。

対する高杉はさして動じる様子も見せず、いつもの歪んだ笑みを浮かべてその視線を受け流した。

「まさか。まだこれからつてところでヅラの野郎が気絶しやがってよ。そろそろ起こしてやろうと思っていたところだ」

窓枠からひよいと飛び降りると、高杉は数歩先の襖に向かって進もうとした。

が、その動きは強張った表情の万斉に遮られる。

「何だ。邪魔するなよ」

「もついいでござろう、晋助」

「——じゃあ、」

高杉の瞳が怪しく揺らいた。

赤く長い舌を唇からちらつかせながら、高杉は着流しの裾から伸びた両腕を万斉に絡ませる。

「じゃあ、お前が俺の相手をしてくれるのか？」

「晋助……」

甘ったるい息を首筋に吹きかけられ、万斉は視界が揺らぐような錯覚を覚えた。

困惑する万斉に、高杉が枝垂れかかる。

触れた素肌が驚くほど冷たくて、万斉は自分の体が濡れていたことも忘れ、反射的にその体を引き寄せた。

されるがままの高杉は万斉の肩に腕を回し、無防備な首筋に深く爪を食い込ませる。

相手の顔が痛みで曇るのを見届けて、高杉はその耳元で囁いた。

「俺は別に誰だって構わない。突っ込もうが、突っ込まれようがどうでもいい。ただ俺は、俺が満足できりゃあ——それでいい」

万斉は、これまで求められるがままに高杉を抱いてきた。

その行為自体に不快感は無い。

むしろ始めは戸惑いがちだった万斉も、いつしか高杉との情事に溺れつつあった。

けれど同時に万斉は知っていた。

いくら高杉が桂を喰らい尽くしても、自分を含む無数の誰かに抱かれても、彼が決して満たされることが無い事を。そう。

高杉が真に求めているものはもう存在しない。

それは彼の手には届かない、過去の陽だまりの中にある。

（―― いや、もう一人いたな）

その男を思い出す時、いつも真つ先に浮かぶのはあの見事な銀髪だった。

まるで地上を見下ろす無慈悲な月のように鮮やかなそれは、目を閉じていても蘇る。

万斉は包帯の奥に隠れた高杉の左目を想った。

桂やあの男は、かつてそれが空を映していた記憶を保有している。

高杉とはもう随分と長い付き合いだったにも関わらず、彼が左目を見せたことは一度も無かった。

見てみたい、と思った事すらなかった。

今になつてみるまでは。

「やめろ。」

包帯に向かって伸ばされた手は、高杉によつて撥ね退けられた。

「どうして？」

「お前には関係ない」

珍しく神経質な口調だった。

万斉はそれを指摘しようと口を開きかけるものの、押し付けられた高杉の唇によつて封じられてしまった。

執拗に挑発するような接吻だった。

「っ！」

瞬間、引きつるような痛みを感じて高杉を押しのと、口内に苦い鉄の味がにじみ出た。

どうやら唇の端を噛み切られたらしい。

高杉は自らの顎に流れた万斉の血を、小指の先で拭って舐めた。

睨み合うままに時間が過ぎた。

外では先程までの激しさがその勢いを収め、小雨程度に落ち着いてきている。

「――雨は嫌いだ」

ふいに高杉が小さく洩らした。

理由を訊ねようとしたのも束の間――

万斉の口は再び高杉に封じられ、傾れかかってきた重みに負けて後方へと倒れこんだ。

二人の体はささくれた畳の上で纏れ合い、溢れ出した。

（ああ、これでまた何もかもあやふやなままでござるな）

万斉は愛しい人の体を抱きながら、火照りつつある己を自覚した。一時の快楽に身を委ねつつ、万斉は高杉が自分の望みに永遠に気づかなければいいと思った。

けれど何れは気付いてしまうのだろう。

気付かせてやるほど万斉は素直ではなかったし、早々に高杉を手放す気もない。

だからいつか来るその時までは自分が抱いていてやろうと誓った。

この獣のような男を。

雨の匂いが滲み込んだ冷たい記憶の一片まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1580/>

彼方に降る雨

2010年10月10日16時17分発行